

## 優秀賞

# テーマ：やさしさと社会、そしてわたし 「私のハラボジ——命の教え」

広島県・盈進高等学校2年 箱田麻実

早朝。真夏の青空。穏やかな風が吹いている。「ハラボジ、外の空気はどうですか」「おいしいなあ。とつても気持ちがいい」。これまでに見た一番の笑顔だった。

私たちが大好きなハラボジは、瀬戸内海に浮かぶ小島に暮らす。そこは（ハンセン病療養所）長島愛生園。私の所属しているクラブは17年間、そこで交流・学習を続けている。

ハラボジ。現在87才の入所者・金泰公（キム・テグ）さん。「ハラボジ」は韓国語で尊敬の心を込めた「おじいさん」。誰にでも分け隔てなく、やさしい笑顔のハラボジ。出会った人は、みんなすぐに大好きになる。

ハンセン病になった。それだけで、ハラボジたち入所者は、家族や古里を奪われた。重労働を強いられ、入所者が仲間の火葬も行った。子孫を残すことも禁じられ、男性は断種を、女性は人工妊娠中絶を強制された。多くの遺骨が療養所内の納骨堂に今も悲しく眠る。「ぼくもここに眠るよ」とハラボジ。

ハラボジは、1926年、現在の韓国に生まれた。日本の植民地時代に海を渡り、戦後の大阪で発病。新妻を残して強制収容された。「あれから、妻に一度も会えなかったことが一番辛かった」と語る。ハラボジの部屋は、生きるための知恵と希望にあふれている。

「人を恨んだことはありませんか」「一度もないよ。病気は誰のせいでもないから。長生きして、こうしてみんなが会いにきてくれるから幸せだよ」。過酷な差別を生き抜いてきた人の憎しみや敵対を超えたしなやかさ。

「差別・偏見をなくすために、私たちに伝えたいことは」「正しく知って、正しく行動する」。背筋が伸びて、きりつとした表情。理不尽な差別に抗する確かな視座。

5月、ハラボジの不自由度が加速したと伝え聞いた。視力が極端に低下し、食事の介護も必要になった。一人歩きができなくなり、一人部屋から完全介護の不自由者棟への引越しをクラブみんなで手伝いに行った。

それからずっと気になっていた。7月、大学生になったクラブの先輩が二泊三日で会いに行くと言っていたので、頼み込んで連れて行ってもらった。

先輩とお部屋を訪ねた。急な来客に少々、驚いたようすのハラボジ。24時間の介護体制。ボタンを押せば、職員が笑顔で駆けつける。「外の空気が吸いたいなあ」とぼつり。とつさに私の口が動いた。「明日朝、お散歩しませんか」。冒頭は、そのときのハラボジの言葉。

「おはようございます」。翌朝、時間前に、ハラボジの部屋を訪ねた。帽子をかぶり、靴も揃えて準備万端。先輩と両脇を抱えてよつこらしよ。久しぶりの屋外。ゆつくりとお部屋を出て、そろりそろりと歩きたした。ハラボジは薬の副作用で両足が下垂している。一歩一歩進んだ。「撫子が咲いています」「そっか」「猫が横切りました」「そっか」。鳥の声が聞こえますか。「ちよつと」。

「こつちだ」。60年以上暮らした長島愛生園。見えなくても、道案内はハラボジ。ときどきよるめき、ハラボジの体重が私たちに寄りかかると、それがとつても幸せだった。立ち止まってはハラボジの額の汗を拭った。「ありがとつ」とハラボジ。この声がいつまで聞けるのだろうかと思つたら、急に涙が目にとまった。

30分経過。ハラボジは、大汗をかいて足が進まなくなった。車いすを用意し、部屋にもどった。ハラボジがぼつり。「また行きたいな」「今度は秋に歩きましょう」と私。

帰り際、いつもハラボジと握手をする。ハラボジの手は後遺症で痺し、感覚はない。知覚麻痺による大やけどで右手の指を切断した。でもいつも両手でしっかりと握手してくださる。あたたかいな。勇気がわいてくる。「ずつとずつとお元気で」「待っているよ」。

ハラボジがいるだけで、私はうれしい。ハラボジが、老いの尊さを教えてくれている。老いは、その人が生き抜いた証。私はそつと、誰かの足並みに揃えられる人でありたい。